

珈琲茶会

岩田洗心館 珈琲茶会 第4回

■ 2016年 10月 2日 (日曜日) 午後1時30分

初座1時間 後座(懇親会)1時間

書齋カフェにて 会費500円(入館料を含む)

■ 本日のcoffee 〆〆もの銘柄

■ 本日の茶菓子

夏目漱石の病、暴力、アウトサイダー・アート(2)

■ 茶菓子提供者

三頭谷鷹史 (美術評論家)

三頭谷鷹史 略歴

1957年愛知県犬山市生まれ。同志社大学卒。美術評論家連盟会員、名古屋造形大学名誉教授。1970年代は美術、写真、演劇、パフォーマンスなどのジャンル横断的な表現活動。80年代以降は美術批評を中心に活動し、80年代以降はいけばな批評も手掛ける。著書に『前衛いけばなの時代』(美学出版)、『宿命の画天使たち 山下清・沼祐一・他』(美学出版)、『共著に『日本美術全集 第2巻』(小学館)、『日本の20世紀芸術』(平凡社)、『美術の日本近現代史』(東京美術)などがある。

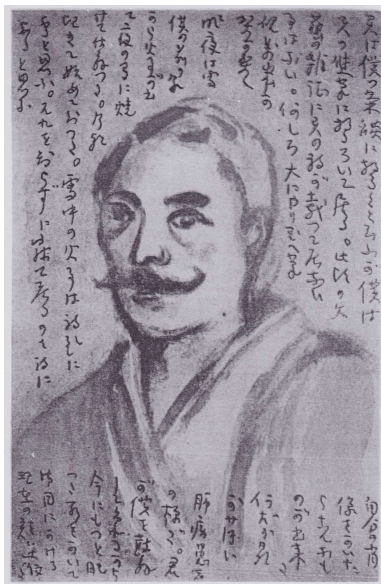
■ 茶菓子解説

この病気が起こると側にいる私たちも困るのですが、第一自分も苦しいのでしよう。それを逃れる一つの方法が絵であったことはたしかだと思えます。だから絵は写生風のものより、頭にあるものをもって描くというふうに見受けられました。そうしてそれは風景にしても人物にしても現実とは飛びはなれた浮世ばなれのしたものでございまして。……夏目鏡子(漱石夫人)

四月の珈琲茶会で漱石の精神病とその病気が原因と思われるDV(家庭内暴力)について語らせてもらった。そして漱石の絵画へ話を進めようとした入口あたりで惜しくも時間切れとなった。このままでは欲求不満である。ということ、今回は漱石の絵画をメインの茶菓子とした茶会を試みたい。先回、漱石によるフランソワ・ミレ1作『修道女のオウム』の異様な模写を話題にしたが、その他を十分に紹介できなかった。漱石の絵画は実に多様である。下手くそなものから、下手でも味があるもの、普通程度のもの、上手いかもされないもの、漱石らしいユーモアが感じられるものなど、いろいろある。それらいろいろの画像を見ながら、いろいろ考えてみよう、というのが今回の茶会。なお、怪しげな絵は漱石本人によって破棄された可能性がある。そうだとするなら現存する絵からアウトサイダー・アートを推測するほかない。むずかしいかもしれないが、やってみよう。



《あかざと黒猫》大正3年



絵葉書「自画像」明治38年

財団法人 岩田洗心館

愛知県犬山市大字犬山字富士見町26

電話 0568-61-4634